

# 嵐牛

## 友の会便り

第七号

2016.11.8発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛蔵美術館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

### 目次

- [1]新年あけましておめでとうございます  
伊藤鋼一郎
- [2]我が家の神棚について  
伊藤鋼一郎
- [3]柿園友垣抄(七)  
加藤定彦
- [4]嵐牛四天王の句碑(2)  
倉島利仁
- [5]講読・鑑賞の会  
今後の予定
- [6]嵐牛蔵美術館 近影

新年あけましておめでとうございます

伊藤鋼一郎

我が家の神棚について

伊藤鋼一郎

新春を迎え皆様ご健勝の事とお喜び申し上げます。本年も嵐牛蔵美術館友の会、宜しく願います。新年に当たり、今年度の大まかな目標を申し上げます。最大の目標は、現在加藤先生の下で編纂をお願いしている嵐牛の資料集の出版です。加藤先生に於かれましたは大変な作業で申し訳ありませんが、宜しく願います。併せて倉島先生、高松先生に於かれましたもサポート宜しくお願いいたします。再来年には何らかの出版記念の特別展を開催すべく、現在掛川市に場所その他協力をお願いしています。二の丸美術館を利用できればありがたいと考えています。次に、昨年同様、嵐牛作品等の講読・鑑賞の会を年五回、続けて開催したいと思えます。友の会便りが届いている皆様には、知人等をお誘いいただき、沢山の参加者の中で開催したいと思っております。なお友の会に際してご希望がありましたらお申し出てください。昨年八月、嵐牛四天王の一人大竹晴笠旧宅を訪問し、御収蔵品を鑑賞させていただきました。本年も嵐牛四天王のすべての子孫の方とコタクトが取れましたので、何らかの会が開催できればありがたいと思っております。昨年末には須賀川芭蕉記念館から関係者二人がお見えになり、先の震災で閉鎖中の芭蕉記念館の再建の話伺いました。再建計画の中に我が美術館所有の、芭蕉・曾良・等窮の三子三筆詩箋を譲りたい計画があり、我が美術館に譲っていただけないかとの話でした。以前私も述べたように、この詩箋は須賀川の公共機関の所有が相応しいと考えており、譲るに当たりこれを大事にしたいと考えています。素晴らしい計画があったら譲ろうと考えています。

〔嵐牛・友の会〕会長

年末は神様のお札を新しくし、新年を迎える習慣となっております。主たる神棚は中二尺で扉が三か所、中央は天照大御神を祀っています。右側は地元の氏神様が普通ですが、我が家では嵐牛時代から信仰している秋葉神社を祀っています。鍛冶屋を営んでいたことから、火除け・火伏せの神として信仰するともに、四天王の一人である水音が秋葉神社に深く関係していたことも影響があるかもしれないと思います。嵐牛作品の中にも度々秋葉神社は登場します。左側は地元の氏神さまの、現在パワースポットで人気のある事こと任八幡宮を祀っています。二年ほど前まで、氏子総代を承っておりました。八百万の神というように、我が家では沢山の神様を祀っています。我が家の北西側に三尺×二尺の祠があり、地の神様、お稲荷様を祀っています。暮れには西方の法印さまに我が家に来ていただき、暮れのお祓いをしていただきました。法印さまは真言密教の修行寺のようです。その時のお札等はかまどの神様とし、台所に祀っています。我が家ではその他、商家に多いえびす講も行っています。商売繁盛、家内繁栄を祈願する祭りです。恵比寿さま、大黒さまを祀っている神棚もあり、当日は両神様のために魚、野菜料理を供えます。鯛の塩焼き、収穫したばかりの大根、けんちん汁、味付けご飯が定番のようです。蔵の守り神は鷹で、蔵の高いところで鷹の剥製が睨みを利かせています。棚の上には手つかずの神棚、お札がたくさんあります。

〔嵐牛・友の会〕会長

柿園友垣抄(七)——初学(ういまな)びの師・鴉山坊——

加藤 定彦

嵐牛の資料集に収録を予定している俳文三十二篇の内から、あまり知られていない嵐牛らの初学時の師、鴉山坊のユニークな指導ぶりを記した文章を紹介したい。それは稿本『文章』(中本二冊)に所収の一篇で、表題は「嘉永二年酉七月廿八日東室鴉山坊追善」とあって、訃報を受け取った嵐牛らの仲間が、報謝・追慕のため成滝(掛川市)の阿弥陀寺で催した追善会の際の文章と発句である。

「鴉山坊の素性については殆ど不明で、文中に「此国に始めて来た」のは「早廿年(近)を挿入)なん成にける」と記されていて、嘉永二年(一八〇)の二十年前は天保元年(一八三〇)なので、その二、三年後の来遊となる。事実、天保三、四年の「松風園蘭英(のち「蘭英堂少風」)評月並五句合」や同人編の『三節帖』(歳旦帖、天保四年・一八三三)に「行脚 鴉山」もしくは「東室 鴉山」などとして句が見え——後掲——、それ以後は他郷へ漂泊したためであろう、姿を消す。

なお、嵐牛の『自筆発句集』(初稿、春)には、「行脚鴉山坊身まかりぬと人の告たるに、其告たる人もいづこにてといふ事はしらざりければ/去年の秋とかた便きく夜寒哉」と記されるが、季違いに気づき、上から抹消の○印を付けている。以下、引用は前半の導入部分を省略し、読みやすいように手を加えた。

其むかしなつかしと、坊が筆すきみ置れしもの、彼是とり出して見もて行くに、おのれらに示されたる言葉の中に、和歌は古言にして直く正しく、いはゞ米の飯なり。連歌、色ありて染飯なり。俳諧、専 俗言のとり扱ひにして麦飯なり。ぎまぐ飯ともいはゞいはん。なほ処の風俗、その人々の好みさまぐにして、春は菜飯、枸杞飯、海苔飯がたぐひ、夏は紫蘇飯、空豆飯、秋は木子飯、芋飯、冬は大根飯、蕪飯。さて、(連句の)裏にうつりては鯉飯、鱸飯、五目飯、そのほか自由自在たるべしなど、時にふれてをかしき教のみ多かりしを互にひひ出だし、おもひ出だして泣きも笑ひもしつ、或は火たき、或は水くみ、各手づからみづから塩かげん心もとなき供物炊きおろし、はた、芋飯の芋のころく〜と粒も揃はず、五目飯のごみ〜し〜く、海苔飯の香も浅く、紫蘇飯のつや〜をかしくもあらざる(連句)一卷をつらね出だして、御前に供へつるを、なほあきたらぬこ、ちのすなればとて、坊が示されたる種々の飯の名を一句に結びて、各 題をさぐり、一ひらの紙にもものして是も又供へたり。その趣きをいさ、か初に筆とるものは、亡き(注2)が多くなり行く数々なる中に入りはぐれたる白童子嵐牛なり。

身にしみる色香や飯のちらし紫蘇  
友ほしや雨のいほりのぬかご飯  
香はありやなしやにありて拔菜飯

月更けて香りしたしや木子飯

柴栗の渋にそまりし御供哉

露のもの皆持ち寄りて五目飯

芋飯や箸にか、らで膳の上

(注1) さまぐ飯：手軽に調理したご飯。「さまぐ」はぞんざいの意。

(注2) 亡きが多くなり行く：省略した前半に引かれている『拾遺和歌集』所収の

藤原為頼の和歌「世の中にあらましかばとおもふ人亡きが多くもなりにける

かな)を踏まえる。

(注3) 拔菜飯：間引き菜を炊き込んだご飯。「拔菜」は秋の季語(『二見貝』)。

(注4) 御供：お供物で、ここでは栗飯をいう。

(注5) 露のもの：露が降りた秋の収穫物。

(注6) 箸にか、らで：ツルツルとすべって箸に芋が扶めず、「膳の上」に残っているさま。

巻いた連句は記されていず残念だが、探題の発句だけでも俳味があつてバラエティーに富み、十分楽しめる。あの世で鴉山坊もさぞ満足気に頷いて見守っていたことであろう。

参考までに、既述の天保三、四年の鴉山坊の作品を以下に紹介し、そのひとつとなりと作風を偲ぶこととしたい。

虫干しや屏風さかひの秋の風  
鴉山(月並)

葉ざくらの下に衣をふるふ

ほと、ぎす啼きて虱に別れけり  
鴉山(同)

きりくす蛸はづしたかきむしい坎

十六夜やがらんとしたる柿明り  
鴉山(同)

鶉の声歌おぼろの上の朧月  
鴉山(三節帖)

僅か五句での論評はやや乱暴だが、平凡な素材・対象ではあつてもユニークなアングルで捉え、感覚も鋭敏・新鮮である。行脚僧(?)の洒脱な精神から来るのであろう、卑小な生き物に注がれる共生のまなざしは一茶に通じるものがある。短期間の交流であつても、こうした鴉山坊の精神や感受性が、若い嵐牛らに血脈として流れ込んだのは確実であろう。

(嵐牛・友の会)顧問

## 嵐牛四天王の句碑(2)

倉島利仁

前々号において、嵐牛四天王の内、鈴木貫一と足立水音（湛水）の句碑を紹介した。今回は大竹晴笠と加藤知碩の句碑について報告したい。

晴笠の句は単独の句碑ではなく、墓石に刻まれている。大竹家代々の菩提寺は、磐田駅北口近く、磐田市中泉の満徳寺（真宗大谷派）である。山門をくぐって右手、本堂の横に広がる墓地のほぼ中央奥より大竹家代々の墓石が並び、その中の一基の、向かって左面に句が彫られている。

行ば来ぬ旅はひとりぞ月の秋

晴笠

署名の左下には「湘堂謹書」とあり、嗣子湘堂の筆による晴笠の辞世を墓石に刻んだことがわかる。句からは、一人不帰の旅に出る寂しさと覚悟が感じられよう。晴笠の句碑は、今のところ他に知らない。

満徳寺からさらに北へ約一・五キロ進むと、旧東海道筋にある見付学校のほど近くに見性寺がある。見性寺は臨濟宗妙心寺派の古刹で、境内には日本左衛門の墓があることでも有名である。立派な山門をくぐると、本堂前に広がる芝生の中央に、高さ一メートル、幅三メートルほどの石台があり、その上に三基の句碑が屹立する。右が知碩、左が汀鷗、中央は芭蕉である。

逃げて行く岬の雨やなつの月

知碩翁高吟 汀鷗拝書

梅が香にのつと日の出る山路かな

ばせを翁高吟 二世早苗庵謹書

開けて見る障子にもあり今朝の秋

七十七齡 汀鷗居士

裏には何も記されていないが、大正年間、汀鷗喜寿の記念に汀鷗門人によって建立されたという。芭蕉の句は春の山路の夜明けの景、知碩の句は岬から見た海にかけて降る夏の雨、汀鷗の句は朝の障子に秋の訪れを見て詠んでいる。

汀鷗は見付の人で、本名を野末重次郎といい、濤々園とも号した。知碩門人の一人で、知碩の早苗庵を継いだことで知られる。ところが、汀鷗の早苗庵継承について、原田和氏『浅羽風土記』（美哉堂書店、昭和三十二年）に次のような内容の文章を伝える。

知碩は臨終の際、高弟秋野湖秋に「早苗庵号は誰が望んでも他に譲らず、もし我が家に継承する者が出たときにはそれを譲る」と遺言した。知碩没後、浅羽連中は足立湛水の教えを受けていたが、見付の汀鷗が二

世早苗庵を継承したいと申し出た。湛水の言により一度は断念したものの、湛水没後、今度は松島十湖を介して浅羽俳友の年長者である溝口可雄に迫ったところ、可雄は知碩門人でないにもかかわらず、汀鷗に二世早苗庵を譲ってしまった。浅羽社中はこれに同意しないことを断言する。

右の文章は、知碩の菩提寺である中野村の西福寺に伝える扁額に記されているという。知碩存命中、西福寺山門外に句碑が建立されたが、その後県道敷設に際し移動せざるをえなくなったため、有志の尽力により同寺本堂庭前に築き直すこととなった。昭和十一年四月二十六日、その建碑式並びに知碩三十三回忌法要を営んだ際の脇起俳諧連歌とともに、後世に伝えるため、その扁額に認められたという。

西福寺は現在の中野公民館の向かいにあったが、昭和四十三年頃に廃寺となり、件の扁額も所在は分からない。右に記された句碑は現在、中野公民館前に移されている。

日の入の大けしきなり雲の嶺

早苗庵知碩

裏面には「明治二十年丁亥十二月十二日 早苗庵社中」とあり、知碩七十二歳のときの建立である。夏の夕方、入道雲に入り日が照り返すスケールの大きな景色を詠んでいる。

また同所には、知碩のご子孫で当会会員の鈴木安子さんが、当時の菊川町立図書館長大塚克己氏のご協力により『知碩発句集』を出版された折に、中野自治会とともに建立した句碑が建っている。

月花の遊び処や此世界

早苗庵 八十七齡 知碩

風雅の世界に遊んだ一生を振り返った辞世の句である。裏面には、次のように刻まれている。

郷土の俳人

加藤知碩先生 明治三十四年没 八十七歳

発句集解説再版記念

平成四年十月吉日

菊川町在住五代目子孫

中野自治会

ここに紹介した句碑の他にも、四天王のはもとより、他の嵐牛門人の句碑も遠州一带にはまだまだ残されているだろう。いずれ現地を訪ね、改めて紹介してみたいと思う。

講読・鑑賞の会 今後の予定

第十回 一月十五日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳

時間 午後一時三十分～四時三十分

内容 嵐牛と知碩について 佐藤清隆さん

嵐牛の俳文について 加藤定彦先生

石川依平「宇津の山越」講読

「嵐牛発句集」講読

第十一回 四月十六日(日)

会場 嵐牛蔵美術館和室 八畳十六畳

時間 午後一時三十分～四時三十分

内容 嵐牛蔵美術館所蔵資料の鑑賞

石川依平「宇津の山越」講読

「嵐牛発句集」講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください  
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと  
がありましたらご投稿ください。



いつになく美しく燃える紅葉 くる年の夢が膨らみます

平成二十八年十二月二十二日 撮影

事務局 伊藤英子